

飛来遅く旅立ちも早く

冬鳥滞在1カ月短縮

秋に飛来し、春先に北の繁殖地に飛び立つ渡り鳥(冬鳥)の日本での滞在期間が1986年に比べて約1カ月も短縮していることを、横浜市内での観察データを基に、東京都市大の小堀洋美教授(保全生物学)が3日までに、突き止めた。

東京都市大教授が 横浜のデータ解析

ウソなど6種 温暖化影響か

渡り鳥が日本に来るが、鳥の滞りに影響を及ぼす可能性がある。温暖化の影響で、渡り鳥の滞りが短縮されている。同様の傾向は北極圏や九州の渡り鳥でも見られている。地球温暖化が渡り鳥の行動に影響を与えるという。地球温暖化の結果、横浜市の年間平均気温が約1度高くなったこととの報告は、欧州や米

国ではあるが、日本での調査は少なく、温暖化の生物への影響を知らず、貴重なデータとなりそう。同市内の「横浜市民の森」では86年から、日本野鳥の会や市の職

生息に困難も

樋口広芳・東京大名教授の話
冬鳥の渡来時期が変わり、しかも大きく変化しているというのは興味深い研究成果だ。鳥が飛来した時期に、食べ物になる植物の種が既になくなっていくというように、植物の結実時期の変化と渡りの時期が対応しなくなるなど、鳥の生息に困難が生じる可能性がある。今後の変化や種の動向に注目していきたい。

んだの鳥の初見日が年々遅くなり、最も変化が大きいツグミではこの間に約19日遅くなっていた。逆に終見日は6種全てで早くなり、ジョウビタキでは、36日も早まっていった。この結果、6種平均で半年余りだった日本での滞在期間が29.7日短縮された。小堀教授は「温暖化の影響は今後、さらに顕著になるとされる。渡りなどの生態の変化が種の生存、その種とつながりを持つ他の生物や生態系に与える影響などを含めて、さらに詳しい研究が必要だ」と話している。

●この記事・写真等は共同通信社、愛媛新聞社の許諾を得て転載しています。無断で複製等、著作権を侵害する一切の行為を禁止します。

東京都市大学グループ
学校法人 **五島育英会**